

# 《南風》の記憶をたどる

永田 修

この作品を撮影した道は、自宅のすぐ側を走る300mほどの直線路で、向こうは河川堤防に上るゆるやかな坂道となっていて見通しがいい。カメラを十字路の手前に据えた。

1984年8月中旬のお盆、台風並の低気圧からの南風が道路上に雲を走らせているのを見た。

数本のバッテリーを自宅で交互に充電しながら、朝の9時から午後3時頃までほぼノーカットで撮影を続けた。事前に明確な撮影設計や編集方針があったわけではない。定点撮影に決めていたから露出を調整する位で何もしなかった。各シーンはほぼ順つなぎで、クルマが横切る部分での転換は即興のアイデアだ。自転車で（前方に見えるカメラの転倒を恐れつつ）雲を追いかけて来るのは私自身だ。

撮影現場での工夫は、ブラウン管の小型モニターを見ながら、当時の民生用ビデオカメラとしては露出をギリギリまで切り詰め、光と影のコントラストを強調しようと苦労したことを憶えている。

編集時に手を入れたのは、モニターの再撮影と、日光のフラッシュインサート。終盤をモノクロにして「影の部分」と女子学生の制服の白い袖を際立たせたことくらいか。編集もアドリブだった。

私はクルマの免許を持っていないので作品のほとんどを近所で撮影している。VHSとはいっても撮影機材一式を担いでの機動力は自ずと限界がある。近場と割り切ってしまうと、ローコストで作品制作ができた。（費用は私のようなホームビデオ作家として、とても大事なことだった）.... 「撮影したテープは常に再利用した」のでオリジナルは残っていない。

カット編集を試みてはみたけれど、私の機材では緻密な繋ぎができなかった。撮影後、作り手の脳内スクリーンに投影されたイメージに、仕上がりを近づけるには介在する機材性能の限界を感じていた。「ちょっと違うよね」というギャップが常にありながら、明らかに悪戦苦闘を楽しんでもいた。

しかし、近場でじっくりと対象と向き合って撮影するということから学んだことがある。

つぶさに見つめること。耳を澄ますこと .....ありふれた風景でもよく観察することの大切さだった。

このことは、後々の作品の基本になっている。自分が見たい「風景と時間」を数分間に凝縮することにこだわった。あくまでアナログ感触に頼る作り方だったので、ぐるぐる回るのが直に見えるビデオテープを電気的・物理的、また手指で直接コントロールする楽しみは、デジタルとは相容れないものだった。

当時の私は映像の職人になりたかったのだろう、と思う。

2022年6月追記：

その後、加齢黄斑変性という眼病にかかってしまいました。DTPデザイナーとして、ビデオアーティストとして、これは職業病でもあります。日々視野が、歪み、フェードアウトしていく様はまさに、ビデオ的でもあります。これをリアルタイムに中継するのも一興かと思いますが、現在は作業的に辛いです。

ながた おさむ／書籍編集デザイナー



1984年



2021年

---

第21回中之島映像劇場  
美術館と映像—ビデオアートの上映・保存—配  
布資料をウェブに再掲 発行:国立国際美術館  
資料発行日:2021年9月18日